# 大地

55. 10. 1
浄国寺

## 宗祖を憶ふ

釈木然　金子大栄

昔、法師あり
親鸞と名づく
殿上に生れて庶民の心あり
貧道となりて高貴の性を失はず

己にして愛欲の断ち難きを知り
俗に帰れども道心を捨てず
一生凡夫にして
大涅槃の終りを期す

人間を懐かしみつゝ
人に昵む能はず
名利の空なるを知りて
離れ得ざるを悲しむ

流浪の生涯に
常楽の郷里を慕ひ
孤独の淋しさに

萬人の悩みを思ふ

聖教を披くも、文字を見ず
ただ言葉のひびきをきく
正法を説けども、師弟を言はず
ひとへに同朋の縁をよろこぶ

本願を仰いでは
身の善悪をかへりみず
念仏に親しんでは
自から無碍の一道を知る

人に知られざるを憂へず
ただ世を汚さんことを恐る
己身の罪障に徹して
一切群生の救ひを願ふ

その人逝きて数世紀
長へに死せるが如し
その人去りて七百年
いまなほ生けるが如し

その人を憶ひてわれは生き
その人を忘れてわれは迷ふ
曠劫多生の縁
よろこびつくることなし

註

この長詩は、昭和三十六年春、東本願寺で、宗祖親鸞聖人七百回御遠忌をつとめられた時、金子大栄先生が作られたものである。先生は九十五年の長い御生涯、身を以て、宗祖の真実の教を求めて精進せられ、その解明教化につとめられた。そして御遠忌にあたり、広大な御恩徳をしのび、遠き宿縁を慶びつつ、豊かな詩情をもってうたいあげられた。先生はあらゆる御聖教を精読せられたが、特に教行信証、嘆異鈔など何十回何百回、わが身に引きあてひきあて読まれた事であろう。この詩にもその中の聖人の御精神御言葉のひびきが伝えられてくる。終り二節の宿縁をよろこばれる先生の表白の親しさ、美しさ、力強さも深い感銘を与えられる。

これを読んだ直後、感激随喜の余り、額に仕立ていつまでも残したく、先生の御高齢をもかえり見ず、無理にお願いしたところ、よく御了承下され京都の御自宅で書いて送って頂いた。勿体ないことである。

そして間もなく、笹井みかさん、石黒まささん、長谷川ヤエさん等頸南の御同行三十余名の方々と、本廟奉仕に行ったが、その折皆様と記念に、表装、額にし、本堂に掲げさせて頂いた。思えば全く有難い御縁である。何とぞくりかえしくりかえしお読み下さい。

（住職記）

# 報恩講に想う

山崎武雄

宗祖親鸞聖人は、今を去る七百二十年の昔、弘長二年十一月二十八日亡くなられました。句仏上人の句に、

○勿体なや祖師は紙衣の九十年

とありますが、宗祖は、自ら愚禿釈親鸞と名のられ、名も無き庶民を御同朋御同行とよび、一生貧道（貧しい一僧侶）となって、ただ本願を信じ念仏を申し仏となる道をよろこばれました。鎌倉以前の平安の宗教は、やはり貴族金持ちの宗教であり、単なる伽藍仏教の嫌さへありましたが、こゝに始めて無智蒙昧罪業深き凡夫の救われる教がある事を身を以てお示し下さいました。そして

「悲しいかな、釈の鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す、はずべし、いたむべし」と述べられひたすら念仏を申されました。

出家の身であり乍ら、妻子を持ち、名聞利欲の山にさまよう、はずかしい、いたましいとざんげして、業深いこの身の救はれる道を喜ばれたのであります。この告白はしみじみ身近かの人に感じられますね。併しともすれば私共は、念仏申す事を、ただ亡き人の冥福を祈ったり自己の幸福来れ不幸去れの、祈願と思ってはいないでしょうか。宗祖の申されたお心持、御態度をしっかり学ばねばならぬと思います。

蓮如上人は、報恩講のみぎりに於てこそ、仏法の信、不信をたづねよ、この時なお信心に身の入らぬ人は「まことに水に入りてあかおちずのたぐいなるべきか」とされました。今年も報恩講を皆でつとめ、法話をお聴きして、人として念仏の道に生きる道を確立致しましょう。

亡祖母、亡母たちは春以来、よい御ローソク、お線香など頂けば大切にとって置き畑に作る豆、小豆、いも類も報恩講にと精を出して作って居りました。檀家の方々もよく、報恩講にだけは詣ります」と口々に申してお出でになりました。

寺にとって一番大切な行事であったばかりでなく、一般の方々にも年中行事の一つだったのです。嬉々として参られるお姿には、敬慕の情禁じ得ませんでした。

併し悲惨な戦争を終え、三十五年、社会生活各家庭生活も一変しました。極度の科学文化の発達は、私共の生活を豊かにしてくれましたが、一面こゝろの不安動揺もかくし得ません。快適な生活を追う余り、これに具う各種の公害交通事故汚職殺人傷害自殺等、毎日目を覆い耳をふさがずには居られぬ事のみ続発して居ります。

生命の尊厳さへ軽く扱はれて居ります。この時とそこゝろの支えとなるものは真実の宗教ではないでしょうか、宗祖が長い生涯自己をほりさげほりさげ、血みどろとなって求められた本願念仏の教こそ、現代の悩みにこたえてくれる唯一の道かと存じます。

報恩講は文字通り、この人の恩にむくい、正しい信心を求める者の講、即ち集りです。大切な一日です。今年も左記の通りつとめます。何れ又御案内致しますが、お誘合せ御参詣下さい。お待ちしております。

記

日時　十一月一日午前十時より

法話　光源寺住職　堀前恵成師

○わげさ、経本御持参下さい。

## 秋 五句

滴翠

長野川崎老婆、田口もちや石田信治さんの相つぐ死をききて

o一葉落ち又一葉落ち寺の秋

o堂前に萩のこぼれ葉畫しづか

真宗寺住職淀野さん逝去、同年の七十才なり

o風無きに又一葉落ちぬ寺の秋

山に遊びし折

o山峡を埋めつくせり大すゝき

o野地蔵に誰が供へしあけび三つ

## 「危険思想」

山崎隆昌

私は芥川龍之介作の「侏儒の言葉」が好きで、〝自分の中に何か明らかにしたい言葉が欲しい〟と思う時によく開き読みます。

豊かなユーモアと鋭い皮肉、巧みな比喩を明快な論理と名文により書かれたこの小冊子は、芥川小説の書斎の中へ読者を導いてくれます。その中に次の言葉があります。

◎「危険思想とは常識を実行に移そうとする思想である」

又さらに

◎「わたしの最も驚いたのはレニンのあまりにあたりまえの英雄だったことである。」

この言葉が書かれたのは一九二三年（大正十二年）から一九二七年（昭和二年）です。つまり、大正デモクラシーから軍国主義時代へと大きく展開していく時代です。その歴史の背景と合わせて考えるとこの言葉の〝重み〟に冷汗をかく思いです。

人を観る時に、とりわけその人が自分の都合の悪い時（例えば選挙はその典型）は、ある一定の枠にはめ込み、自らを安心させることがあります。『アカ』とか『がんこ者』『新しいものかぶれ』『臆病』等々数えきれません。しかも多くの場合、それは自分の立場を護るものだけのものであって相手を全く理解しようとしていないのです。

親鸞は次のように語っています。

「念仏者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪業報を感ずることあたはず、及ぶことなき故なりと」（歎異抄七章）

ここには、〝自己〟もなく〝他人〟もなく、信心の念仏者あるのみです。

自己を想う時、その対立として相手を想います。そして自己を守り、可愛いがる程、相手を遠ざけ、枠にはめ込み、傷つけます、

混沌とした時代状況の中で、今こそ、自らの立場を離れ、しかも自らの眼で観、耳で聞き、手で触り、足で踏み、確かな歩みを続けたいと願うのです。

# 「敬老の日」を迎へて

新井市国賀
饒　村　久　司

九月十五日、第十五回目の「敬老の日」です。「敬老の日」の制定された趣旨は、㈠多年社会につくした老人を敬愛し長寿を祝う。㈡老人福祉について国民の関心と理解を深める。㈢老人が自らの生活の向上に意欲を高める。㈣公共団体が以上の趣旨にそう行事を実施するよう努める。というものでありましたが、今日はどうでしょうか、単に一日だけの行事に終ってしまう傾向がつよいのではないでしょうか。

昭和五十四年度の日本人の平均寿命は、男七十三、四六才、女七十八、八九才と年々伸びて、今では世界の先進国どの国でも経験したことのない速さで高令化社会への道を進んでおります。

老人というと「人生のたそがれ」又は「終着駅」などと言われ、うら悲しさを感じさせられます。自分の意見を主張すれば「ガンコ」だと言われ、若い人達に従うのが「おさめのよい老人」とされていますが、これまでの老人の社会的地位が、こんな言葉の中にもうかがわれます。

また「働かざる者食べからず」と人間を単に生産性の立場からのみながめ、老人の問題は家族主義の美名のもとに、家族内の個人の問題としてひそかに片付けられてきました。

しかし現在は、老令人口の増加核家族化、都市化が進むなかで、老人問題は社会問題として大きく取り上げられてきました。今は国の政策も徐々にではあるが前進してきました。

そこで、社会福祉、社会保障以前の問題として「老人に対する考え方」について反省してみたいと思います。

今までは老人は「社会のあまりもの」「厄介もの」であるか、または、「あわれみ」か「慈善」の対象であって、老人を同じ世界の人間としてでなく、ちがった世界に属するものとの先入観と偏見から出発した老人観でした。老人にも働きたい者には適当な職と生活を保障できる収入が確保されねばならないのは他の世代と同じです。老人にも、一人になりたい時も、賑やかにしたい時もあるでしょう。

社会のすべての人に役割があるように、老人にも夫妻、父母、祖父母として、また友人、隣人としても役割があるはずです。『学ぶ』ということも若い人だけの特権ではありません。明治、大正、昭和の三代を生きぬいた人達が社会を構成する一員としての豊富な知恵の持主として、社会存続と発展のための役割と価値が認められる社会であってほしいし、またそのような老人になりたいものです。それには、いくつになっても積極的に生きがいをみい出す意欲をもつと同時に、他人の幸せが自分の幸せ、一部の幸せが全体の幸せにつながるというものの見方と生活態度を身につけることが必要です。

〈後記〉冷たい寒い夏でした。作物の出来具合が心配です。都合で発行が遅れてしまいました。おわびします。この「大地」をより内容豊かにするため、同朋同行の皆様の御協力をお願いします。原稿御意見等お寄せ下さい。

（隆昌）